

進藤確齋（しんとうかくさい）（1/2）

～実学の実践者～

進藤確齋は相知の酒造家進藤伝兵衛の三男として宝暦10年（1760年）に生まれました。名前を辰蔵また誠之といい、確齋は号です。進藤家は代々教育に熱心で、唐津藩内ではじめて相知に閩塾の信齋塾ができたとき、資金を援助したのは確齋の祖父源右衛門でした。

この信齋塾の先生を吉武法命といました。法命は唐津藩の代官（役人）として相知に来たとき、『大学』という本を何人も持っていたので驚きました。この人たちはお寺の和尚さんから時々教わっていたのです。そこで法命は塾を開き学問を教えることにしました。そのうちに唐津藩内に7つの塾ができました。

法命は藩の役人をやめたあと、この7塾を巡りました。法命の学問を実学といます。これは、本の中の言葉の意味や文字だけを覚えても何もならない。そこに書かれていることを毎日の暮らしの中に活かす勉強、すなわち実学こそが大切であるということです。

確齋は法命の死の翌年生まれていますので、直接の指導は受けられませんが、法命の第1の弟子向復齋からしっかりその心と学問は伝えられました。

確齋は若いときに医者をした時期もありますが、藤津郡塩田郷の前田伸右衛門に治水をしっかりと学びました。また、多久の儒学者草場佩川とも仲良くして勉強しています。

唐津藩主水野忠邦は確齋の素晴らしさをみとめて畑島村の庄屋にしましたが、他郷にいては親孝行ができないと、庄屋をやめて親元近くに帰りました。そして山崎村に希賢堂という塾を開いたのです。教えを受けた人は、子どもから大人までその数は200人を越えるといい、その中に巖木浦河内の秀島鼓溪がいました。

「学びて、時にこれを習う。これまた、嬉しいではないか。友、遠方より来たる。これまた楽しいではないか。」また、「自分の体は父母から受けたものだから、体に傷をつけないことが、孝行のはじめである」「世の中に出たら、いい仕事をして有名になると、それとともに自然に両親の名前も出る。これが孝行の終わりである」と。

塾では、行儀や作法にも厳しくしました。障子を破ったり、墨をつけたりすると二十文、履き物の乱れには四十文も罰金がつきました。四十文では、そのころの米150キログラムが買えました。

確齋は実学を実行しました。山崎に農業試験田を作り、肥料のことや、稲の害虫駆除などの研究を重ねて、その結果を藩に伝え、それが藩内農業の手本とされ、増産につながりました。

また、農商不離（農家があって商家が立ち、商家があって、農家もたちいく）の考えを持ち、自分のお金で買い求めた米を、貧しい農民に貸したり、不作の年には与えたりして、農民を救済しました。

～2/2へつづく～

分野 人物

地域 相知

◎地図・写真・統計資料など



進藤 確齋
(1760～1822)

（『郷土につくした人々』より）

◎引用・参考文献（出典）

◆『郷土につくした人々』
～ふるさと唐津の偉人たち～

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

進藤確齋（しんとうかくさい）（2/2）

～実学の実践者～

～1/2からつづく～

その後、山崎には親孝行ができないと相知に帰り、自宅裏に明倫塾^{めいりんじゅく}を設けました。父はこのとき90歳を越えていました。

時の藩主水野忠邦はその功績を認めて名字帯刀を許し、塾の費用として毎年米7俵ずつを贈っています。藩主が替わって小笠原氏になっても、名字帯刀と塾の運営費はそのまま受け継がれました。

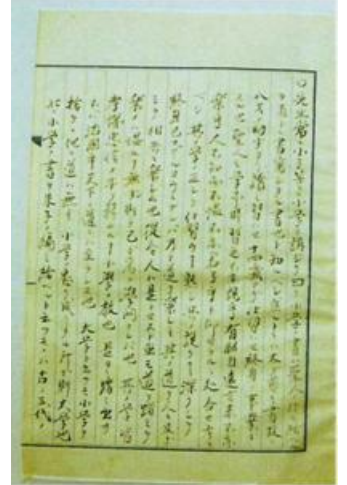
このように親孝行だった確齋でしたが、父をこの世に残して文政5年（1822年）、63歳で亡くなりました。死の直前「鼓溪がいるから、安心して死ねる」といいました。彼によって確齋が目指す学問の流れはしっかり明治時代へと受け継がれていきました。

鼓溪は『天徳録』と題して、確齋の言行をしっかりと書き残しています。この文章もこの書物によるものです。いま確齋は自宅裏の天徳の森に眠っています。「確齋進藤先生」の墓碑銘は多久の草場佩川が書きました。

分野 人物

地域 相知

◎地図・写真・統計資料など



天徳録



確齋の墓碑

（『郷土につくした人々』より）

◎引用・参考文献（出典）

◆『郷土につくした人々』
～ふるさと唐津の偉人たち～

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html